

浜松歌国作『忠孝貞婦伝』『駿河舞』考

藤川 玲 満

はじめに

浜松歌国は近世後期の大坂の戯作者で、歌舞伎作品や随筆『摂陽奇観』を著したことで知られる。著作は三〇点余が残っているが、そのなかに読本が七点あり、読本の執筆は歌国の文学活動においてある程度の位置を占めると言うことができる。

読本作品は、具体的には『矢口統話新田神霊』忠孝貞婦伝（文化一〇年（一八一三）刊）、『キノニ全伝 駿河舞』（文化一一年刊）、『仮粧水千貫槽覧』（文化一二年刊）、『日本廻国勸懲記』（文化一二年刊）、『大和国筒井清水』（文化一四年刊）、『今昔二枚絵草紙』（文政二年（一八一九）刊）、『会稽三浦蒼』（文政九年刊）である。本稿では、近世後期の上方の読本制作の動態の一端を知るべく、これまでに具体的な検討のなされていなかった歌国の場合の読本執筆の方法を明らかにすることを試みたいと思う。

一 歌国の読本執筆

歌国については、まず、船越政一郎氏^{〔注1〕}と秋葉芳美氏^{〔注2〕}が歌舞伎作者としての履歴を中心に伝記を明らかにされている。そして歌国の読本に関しては、横山邦治氏が、江戸前の稗史ものを著した「江戸の下風に立つことに甘んじている」上方読本作者として栗杖亭鬼卵とともに歌国を挙げておられ^{〔注3〕}、長友千代治氏はその作風について、多くは脚本や浄瑠璃に原拠を求めたもので創作性に乏しい^{〔注4〕}とされた。江戸読本の動向に追隨した一人という位置付けと、芸能作品を原拠としたことが指摘されているのである。

芸能作品を原拠とした執筆について、各作品の具体的な状況を確かめておきたい。まず、『忠孝貞婦伝』^{〔注5〕}は、角書に「矢口統話新田神霊」とあり、また序文（苔の屋のあるじ筆）にも「風来山人が余所の時雨に水まさるとの筆のすさみとした

はしき玉川の末なる箭口の渡し守が昔がたりをいちはやくも歌国は六郷の船長に聞とりて六冊の趣向を設け」とあることから、福内鬼外（風来山人）作の浄瑠璃『神靈矢口渡』（明和七年（一七七〇）初演）を素材にしたものと考えられる。

『駿河舞』^{〔注6〕}と『仮粧水千貫槽篋』^{〔注7〕}については、それぞれ歌舞伎の『傾城天羽衣』（並木正三作、宝暦三年（一七五三）初演）と『道中千貫樋』（並木正三作、宝暦四年初演）が原拠であることを長友千代治氏が指摘されている^{〔注8〕}。続く『日本廻国勸懲記』^{〔注9〕}と『大和国筒井清水』^{〔注10〕}は、管見では原拠の作品を知り得ていない。

『今昔二枚絵草紙』^{〔注11〕}は、別称を「於元亀松一期物語」とするもので、敵討話に孝女「おも」と二人の「亀松」という名の男の色恋沙汰を交えた内容である。これは『撰陽奇観』^{〔注12〕}に明和二年五月の記事として、「おもと亀松心中に出て浮名たつ 道頓堀関東屋藤右衛門抱舞台子山下金作弟子亀松と^{し十九} 船場座摩社内亀屋座へ出勤せし所座摩前橋本屋亦市娘おもと^{同年} 密通いたし住吉の辺へ心中に出て見咎られ兩人共存命（後略）」とある巷説がおおもとの素材であろうが、歌舞伎に『（お元亀松）二枚絵草紙』（藤本斗文作、宝暦六年初演）や『おもと亀松二枚絵草紙』（元文元年（一七三六）初演）といった名

称の似通う作があり^{〔注13〕}、これらの脚本は現在不明ながら、本作に影響している可能性が推測される。

『会稽三浦管』^{〔注14〕}は、浄瑠璃の『三浦大助紅梅豹』（長谷川千四・文耕堂作、享保一五年（一七三〇）初演）を読本化したものであり^{〔注15〕}、その内容は『三浦大助紅梅豹』をほぼ敷き写しにしていることが判明している^{〔注16〕}。

歌国の読本の原拠との対応関係については以上のような状況である。そして、既に関係の実態が明らかにされている『会稽三浦管』以外で素材源・原拠本文と比較対照することが可能な一作目の『忠孝貞婦伝』と二作目の『駿河舞』について見てみると、これらは作者が構想や趣向に工夫を凝らして読本に仕立てた様子が見受けられる。以下、この二作について、形成方法を具体的に検証することにより、歌国の手法を考えたいと思う。

二 『忠孝貞婦伝』の構想——『神靈矢口渡』との関係

『忠孝貞婦伝』半紙本六卷六冊は、前述のように浄瑠璃の『神靈矢口渡』^{〔注17〕}を素材としている。『神靈矢口渡』は、新田義興の武蔵国矢口渡での横死からその後の遺臣の辛勞・活躍を描く内容である。

ではまず、『忠孝貞婦伝』の梗概を掲げる。(説明の便宜上、番号を振った。)

- ①新田義興の死後、官軍の泉田隼人は、上野国赤木山に落ち行き、元家臣で弭師の島田野助の山家で世話になる。
- ②東條左衛門尉満次は、足利尊氏から上野国を賜り、その忠臣大庭主計は、新田の山城をあずかることとなる。
- ③主計は、先祖の霊に導かれて一人娘里見の婿を探しに出、赤木山麓で隼人が悪鳥を撃ち落とすのを見て、隼人を婿に決める。
- ④里見を恋慕する東條家の佞臣八波田段右衛門は、主計の妻染井の甥才六から隼人の婿入りを聞き、才六に縁談の妨害を頼む。
- ⑤才六は、盗賊千吉を語らって隼人(伊織と改名)・野助主従を襲い、才六は伊織に斬られる。段右衛門は千吉とともに、伊織主従を再び狙う。
- ⑥千吉が大庭家に現れ、染井が才六を婿にする約束を違えたと偽りの因縁を付けて伊織に勝負を願い出、止めに入った染井を切りつけて逃走する。主計は伊織に大庭家を継がせて出家し(法名道念)、染井は絶命する。
- ⑦かつて新田義興の横死に与した矢口の渡守頼兵衛の手下陸蔵

は、薬商人に扮して稼ぐ折に段右衛門と知り合い、段右衛門に助力することを請け合う。

- ⑧大庭家では、野助が染井の敵捜しに出立し、伊織夫婦には男児落葉松が誕生した。東條家で相剣が行われ、相者幣原句勘は伊織の刀に天死と闘争の悪相があると告げるが、伊織はこの刀を佩くことを止めなかった。
- ⑨段右衛門が伊織をもてなす間に東條家の名刀が盗まれ、これが大庭邸の庭から見つかったことで、伊織は嫌疑をかけられて自害する。刀は、段右衛門の企みで陸蔵が大庭邸に潜入して埋めておいたのであった。
- ⑩里見は落葉松を連れて大庭の元家臣万八の家に身を寄せる。そこに染井の敵討を果たした野助が現れ、野助は万八に里見親子を扶養する金を託して伊織の敵捜しに再び出立する。万八は託された金を持って行方をくらます。里見と万八の妻お鹿はともに女兒を出産する。
- ⑪段右衛門はお鹿に近づき、里見を自分の妻にしようと目論むが里見は拒む。
- ⑫道念、野助、里見が再会して万八の悪心が露顕し、お鹿は娘を殺して自害する。このとき縁の下に潜んでいた万八も懺悔して自害する。

⑬大庭家の人々に伊織の敵捜しを導く夢告があり、里見と娘は織女に、落葉松と野助は絹商人に身をやつして出立、頓兵衛が商売をする新田庄に入る。頓兵衛の娘お船は落葉松を恋慕する。敵討の計画に気づいた段右衛門と陸蔵は頓兵衛を語らい、落葉松を討つ計略を立てる。

⑭お船が落葉松の元を訪れた際に、頓兵衛が落葉松と誤認してお船を切りつける。頓兵衛は事態を知り、悔悟して即座に出家、道念の弟子となる。

⑮頓兵衛の告白で段右衛門の悪事が露顕する。陸蔵と段右衛門を討ち果たした落葉松は勘解由と改名して大庭家を再興、里見は娘とともに出家して貞操尼と名乗り、野助は勘解由の後見となる。

では、素材源との関係を中心に、『忠孝貞婦伝』の形成の様相を検討していく。比較のため、次に『神霊矢口渡』の概略を掲げる。

新田義興は、家宝の矢を弟義岑に託して足利尊氏討伐に向かい、矢口渡で謀殺された。義興の家臣のうち由良兵庫は降伏し、南瀬六郎は義興の子徳寿丸を連れて逃れる。兵庫の邸に六郎と徳寿丸が来たところに、彼らを追って義興を謀殺した竹沢監物が現れ、徳寿丸の首を求める。兵庫は偽って自身の子友千

代を身代りに斬る。一方、義岑は家宝の矢を盗まれ、馴染の遊女台を伴って東下し、義興の旗持ちであった僧道念から新田家の旗を得て矢口渡に向かう。かつて義興謀殺に与した渡守の頓兵衛は義岑を狙うが、頓兵衛の娘お舟が身代りとなって義岑を逃がし、また、新田家の矢が飛んできて頓兵衛らを射貫く。

まず、『神霊矢口渡』では序盤に矢口渡で謀殺されるまでの義興が描かれるのに対して、『忠孝貞婦伝』は、冒頭から義興没後の一家臣を主人公に書き起こしており、話の始点が異なっている。そして、登場人物の多くも異なり、『神霊矢口渡』と同じであるのは渡守頓兵衛の家人のみで、義興の家人や竹沢監物は登場せず、別の話に仕立てられている。しかしながら、主要人物には『神霊矢口渡』の人物たちを投影した役回りが与えられている。以下にそうした対応関係を整理してみる。

まず、『忠孝貞婦伝』の伊織（隼人）は、彼の死を発端とする敵討が話の主軸となることからして、『神霊矢口渡』での義興の位置にある人物である。伊織の妻里見は義興の妻にあたる。伊織の子の落葉松は、義興の子徳寿丸に相当するが、終盤の頓兵衛一家との接触場面（梗概⑭）では、義岑の役回りが与えられている。敵方としては、段右衛門が『神霊矢口渡』の竹沢堅物の位置にある。伊織の家臣野助と大庭家の元家臣万八

は、義興の二人の家臣（南瀬六郎・由良兵庫）と対応関係にあると言える。万八の妻お鹿は伊織の妻里見に付き添っており、義興の妻に付き従う兵庫の元妻の設定を受け継いでいる。また、大庭主計の法名「道念」と「万八」は、『神霊矢口渡』に同名の人物がいる。『神霊矢口渡』の道念は、新田家の元旗持ちで義岑らを匿う。『忠孝貞婦伝』の道念は、娘一家の援護者となる点でこれを継承している。『神霊矢口渡』の万八は、義岑らを匿う道念の庵室に押しかける悪人である。これに対して『忠孝貞婦伝』の万八は大庭家の元家臣となっていて設定が完全に異なるが、途中悪心を起こすところは、由良兵庫（前述のように人物設定上、万八と対応関係にある）には無いもので、これは『神霊矢口渡』での悪人万八の要素を混ぜたのではないかと考えられる。

続いて、ストーリーや場面の趣向を見ていく。まず、『忠孝貞婦伝』において、『神霊矢口渡』との関係が最も顕著なのは、終局の頼兵衛一家の登場場面である。父頼兵衛に落葉松と誤認され切りつけられたお船の死際の台詞に、

浮世に生れた人ごとに。欲を知らぬはあらざれども。おまへのやうに凝かたまり。仏とも法とも弁えず。人は死ぶが倒れうが。我さへよければ構はぬと。身勝手斗の強欲非道。

あらふ事か。源氏の大將義興さまをたばかつて。むぎく
と殺したる。其天罰が我子に報ひ。死る此身はいとはねど
も。跡に残りしお前の身の上。案じらるゝがまよひの種。

（中略）死る娘を不便とおもひ。御心をひるがへし。落葉
松さまを助けてたべ。頼みまする

とあるのは、義岑を落葉松に置き換えたほかは『神霊矢口渡』四段目からの丸取りである。しかし、娘のこの台詞に続く頼兵衛の動きは、正反對のものになっている。『神霊矢口渡』では、刺した相手が娘であったと知った頼兵衛は「義岑と女めは何国へやつた。有やうにぬかせく」と。目をむき出し怒の大声を上げる。さらに父の翻心を懇願する娘を嘲り笑って「此年迄仕込だ根性。釈迦如来が元服して。誤り証文書ふといふても。いつかなく翻へさぬ。相図を定めた義岑めを取逃しては。竹沢様へ約束の顔が立ぬ」と突き飛ばし、義岑謀殺へと直走る。そうしたところを『忠孝貞婦伝』では、娘を切りつけたことに氣付いた頼兵衛は悔悟して即座に出家する。頼兵衛が白状したことで段右衛門の悪事が露顕し、落葉松が討ち果たす大団円へと繋がっていく。

本作の序文で言及しているように、矢口渡での頼兵衛との対峙場面を描くことは『忠孝貞婦伝』の眼目であったと考えられ

る。そして、その際に作者が採った趣向は、頓兵衛を徹底した悪人に描く素材源の特色を転換し、頓兵衛を懺悔させるというものであった。お船の台詞を素材源から丸取りしたことは、この転換の趣向を際立たせている。また、この趣向は、話の展開上、結末は『神靈矢口渡』に做うことができないためになされたものとも言える。この場面に続く『神靈矢口渡』の終局は、盗まれていた新田の家宝の矢が何処から飛んできて頓兵衛らを射貫いて滅ぼすというもので、新田大明神の草創譚に帰結する。しかし『忠孝貞婦伝』は、もとより新田家の物語を展開しておらず、その家宝の矢を描いていない。矢をめぐるストーリーの代替として存在するのが、伊織の主君東條家の名刀の盗難事件（梗概⑨）であり、これを発端とする敵討話を作品の中心に据えている。矢の奇瑞ではない形で結末を導く必要と相俟って、『忠孝貞婦伝』では頓兵衛について大きな転換を施すこととしたと考えられる。

また、登場人物の造型に素材源の要素が投影されたことに加え、場面にも素材源の筋を踏まえて作られたと見える箇所がある。伊織の死後、妻里見が元家臣の万八宅に身を寄せたとき（梗概⑩）、里見と万八の妻お鹿はともに懐胎しており、相孕みを忌む意図でお鹿は井戸の毒水を飲んで子を失おうとし、

それを見た里見は自身が替わろうとして、止め合いになって争う。この場面は『忠孝貞婦伝』のストーリー展開上は不可欠とは言えないものである。その描かれた意味として考えられるのが、素材源の趣向の投影である。『神靈矢口渡』三段目での、義興の子徳寿丸の身代わりに家臣兵庫が息子の友千代を斬る件を、人物設定上、義興の妻を里見、兵庫の妻をお鹿に当てたことと併せて、主従どちらかが子を失うという趣向として継承したのではないかと考えられる。

以上のように、『忠孝貞婦伝』の素材源との関係については、もとの話に手を加えるということではなく別の話を形成するなかで、素材源の主要人物に当たる登場人物の配置を工夫することと、別話を展開しておきながら終局では素材源を完全に模する場面に帰着させるという趣向を作り上げることに注力した様子を見ることが出来る。

次に、『神靈矢口渡』以外の素材源についても触れておきたい。一つは、『史記』^{（注18）}高祖本紀の逸話が『忠孝貞婦伝』の序盤、伊織と里見の婚姻に至る筋立て（梗概③）に利用されていることである。里見の父主計が先祖の霊に向かい、婿とすべき者のいる方角を香の煙で示唆してくれるよう祈る。すると風が起こって煙を異の方角に吹き送る。主計は東南方向に婿を探

しに赴き、伊織が悪鳥を撃ち落とすのを見て婿入りを乞う。しかし主計の妻は獵人を婿に決めたことを非難する。

主計が伊織を婿に決め、それを妻が非難する件は、本文に主計の台詞で「昔漢の高祖は一亭の長たりしかども。呂叟一たひ見て聳かねとし。後天子と成て其女は后に備れり。これらの事をおもひ斗れよ」とあり、高祖伝に言及している。これは『史記』に、

呂公曰く、臣少きより好みて人を相し、人を相せしこと多けれども、季の相に如くは無し。願はくは季、自愛せよ。臣に息女有り。願はくは季が箕帚の妾と為さん、と。酒罷む。呂媼、呂公を怒りて曰く、公、始め常に此の女を奇とし、貴人に與へんと欲せり。沛の令、公に善し。之を求むれども與へざりき。何ぞ自ら妄に劉季に許與せし、と。呂公曰く、此れ兒女子の知る所に非ざるなり、と。卒に劉季に與ふ。

とあるもので、呂公（のちの高祖後の父）が高祖を聳に見込んで妻の反対を押し切った婚姻時の逸話である。これに加えて、主計が聳搜しで東南の方角に導かれる展開についても、高祖本紀に、

秦の始皇帝常に曰く、東南に天子の氣あり、と。是に於て

因つて東游して以て之を厭せんとす。高祖即ち自ら疑ひ、亡匿し、芒碭の山澤巖石の間に隠る。

と、始皇帝が東南の方角に天子となる存在（高祖）の居所を察知するという似通った逸話がある。『忠孝貞婦伝』ではこの話を、大器の者を捜し当てる趣向として取り入れたのであろう。この高祖伝の利用は、素材源の持つ英傑の印象を作中人物に付与するためになされたものと考えられる。

もう一つ、素材源として挙げる事ができるのが、仮名草子『智恵鑑』（辻原元甫作、万治三年（一六六〇）跋）^{〔注19〕}の「一話「葉売幻術をする事」である。これは『忠孝貞婦伝』で頓兵衛の手下である陸蔵が段右衛門と知り合う場面（梗概⑦）に利用されている。次のような場面である。頓兵衛は手下に幻術を使って財を集めさせており、陸蔵は薬商人に扮し、観音像の手に薬が吸着するさまを見せて見物人に売っている。そこに武士（段右衛門）が近付いて、陸蔵を連れて酒店に行き、無銭飲食しても咎められないさまを見せて、陸蔵の幻術を教えてくれれば自分も今の術を明かすと言う。陸蔵が、観音像の手は磁石で、薬のなかに鉄屑を混ぜているという仕掛けを明かすと、武士は無銭飲食に見えるのは先払いしてあるだけだと明かして名乗り、陸蔵に奸計への助力を頼む。

この話の骨格、即ち薬売り・無銭飲食をめぐる二人の遣り取りと仕掛けが、「薬売幻術をする事」にあるところをそのまま取り込んだものであり、これに陸蔵の薬売りの口上等の脚色を加えて場面を完成させている。『忠孝貞婦伝』は、筋立ての上で段右衛門と陸蔵を通じさせる（接触させる）ことが不可欠と言えるが、同時に、二人の邂逅は不自然なこともある。この場面での『智恵鑑』の頓知話の利用には、その不自然さを、素材のもたらす喜劇の印象で乗り越える意図があったのではないかと推測する。

三 『駿河舞』の構想——『傾城天羽衣』の読本化

続いて、二作目の『駿河舞』について検討していく。『駿河舞』半紙本六巻六冊は、東山の世界を描く御家騒動物の歌舞伎『傾城天羽衣』^{〔注20〕}を原拠とする。先行研究では、横山邦治氏が、上方での「巷談もの」（庶民間の話や噂が読本化されたもの）の作品として本作を挙げられている^{〔注21〕}。長友千代治氏は作風について「各巻に劇的な場面設定をして興味をそそるが、複雑な構成や人物の行動に論理性を欠くうらみがある。」とされている^{〔注22〕}。

まず、『駿河舞』の梗概を掲げる。

①秘曲「羽衣」の伝わる伶人福原家の子孫貞澄は、都を追われ、三保が崎で漁夫を生業として伯寮と名乗る。

②足利義政が「羽衣」の散逸を惜しむことを知った風早左京之助はその伝授を願って三保に到り、伯寮は左京之助に秘曲を伝授して福原家の再興を託す。

③赤松満祐の子霧雲太郎は、三保で見初めた伯寮の娘乙女と秘曲とを奪って伯寮になりますことを企み、伯寮宅に押し入る。秘曲の一部が奪われ、深手を負った伯寮は左京之助に乙女を娶せて死ぬ。

④桑名の渡で、赤松満祐は山名宗全の元家臣である北川宗左衛門に会い、細川家と山名家に足利家から分け与えられ紛失した二振の名刀は自分が盗んだと告白し、細川家討滅に加勢するよう誘う。宗左衛門は、偽って赤松の味方を装うこととする。

⑤細川家臣の神楽良三八は、紛失した名刀捜しに出る目前、眼病を患う。妻爪木は葉代のため自分が身売りするのに先立ち、息子三松を稲荷神社に捨てるが、その後、騙されて自分ではなく義娘お露を廓に売られる。

⑥山名宗全の娘天津妃を許嫁とする細川勝元の弟勝家は、遊女

となつたお露（妓名御空）に馴染んで邸を追われる。勝家と御空は、身を寄せた庵で足利義親の未亡人・御空の生母・天津社に遭遇し、そこに赤松から山名家の名刀を奪還した宗左衛門も現れる。山名家再興と赤松討滅の計略のために御空は自害する。眼病が治癒し、この事態を窺い見ていた三八は赤松討伐を宗左衛門と約する。

⑦満祐は、旅商人の傍ら捨て子の養育に勤しむ元家臣の組屋六郎左衛門に、拾い育てた細川勝元の嫡男勝千代を斬るよう命じる。組屋は同様に拾い育てた三松を身替りに殺して勝千代と偽り、満祐から細川家の名刀を託される。三松を捜して訪れた爪木に、組屋は勝千代と細川家の名刀を託す。

⑧三八は、味方を装って霧雲のもとを訪ね、捕われ連行されてきた乙女と左京之助を引き取る。さらに足利・細川家討滅を援護すると約し、伯寮になりますます計略を実行するよう説き伏せて霧雲を足利義政のもとに差し向ける。

⑨義政のもとで霧雲が秘曲を披露するところに、満祐の首を討ち取った宗左衛門と三八が現れる。乙女と左京之助が霧雲を討ち果たし、福原家と山名家は再興する。

では、『駿河舞』における、原拠の『傾城天羽衣』からの摂取と改変の様相を見ていきたい。まず、『傾城天羽衣』について、

本作で依拠するところを中心にごく簡略に概要を掲げる。

山名家の婿養子となつた細川勝家は、遊女の身請代が用意できなければ重宝の天の羽衣を質に置くとする証文を書いたことから、羽衣の紛失騒動で陥れられて追放される。山名宗全家臣の桂左衛門は、宗全から密かに羽衣を託されて遺言を受け、もう一つの重宝である秘曲を盗み持つ赤松満祐の倅と共謀して將軍足利義政討滅を狙うが、細川勝元に見頭わされる。

以上の大筋に、足利家の姫が捨て子にされる件や、勝家周辺の動向が絡んで展開する作品内容である。『傾城天羽衣』と『駿河舞』の間では、まず、ストーリーの中核における大きな転換が二点ある。一点は、紛失する（盗難に遭う）重宝について、原拠では「天の羽衣」と「霓裳羽衣の曲の一卷」であるところを、『駿河舞』では、足利家より細川・山名両家に分け与えられた二振の名刀（富士丸と深雪丸）と、伶人家に伝わる「羽衣」の秘曲としている。もう一点は、登場人物の善悪の役回りに関して、原拠では山名家家臣の桂左衛門が將軍討滅を狙って赤松と共謀する逆賊の側であるところを、『駿河舞』では、桂左衛門（北川宗左衛門）が味方を偽って逆賊赤松の罪を見頭わす正義の役となっていることである。

続いて、登場人物とその造型、ストーリーや場面の趣向、素

材の観点から『駿河舞』の形成の具体相を捉えていきたい。登場人物について整理すると、その行状や性格付けは別として原拠を踏襲しているのは、足利義政・山名宗全・細川勝元・細川勝家・天津妃・桂左衛門である。そして、新規に登場するのが、風早左京之助・神楽良三八一家・組屋六郎左衛門である。

また、原拠の設定を改変した人物造型もある。その一つが赤松父子である。原拠での故赤松満祐の倅の役を、満祐が実は生き延びていた設定にして、満祐と倅の靄雲太郎を登場させて二手に描き分けている（なお、倅の名「靄雲」は原拠にあるものの取り入れなかった勝家の悪臣村雲大学を用いている）。その状況を具体的に確かめておきたい。原拠での満祐の倅は、山名宗全が桂左衛門に向けた遺言のなかに、重宝のうち秘曲を盗んだ者として登場し、その後、桑名の渡で左衛門と共謀の密談をする。また、これとは別に、捨て子にされていた足利家の姫を赤松の倅が拾うストーリー展開もある。『駿河舞』では、重宝の秘曲を強奪するのが赤松の倅靄雲であり、名刀二振は父満祐が盗んだものとしている。靄雲の秘曲強奪については具体的な場面（梗概③）を描き込んでいる。桑名の渡での宗左衛門との密談場面（梗概④）は、実は生き延びていたことの告白と併せて父満祐の役である。この改変では、悪役の存在と描写を増幅

させ、作品の終局でその討滅に収斂していく構想を工夫していると言うことができよう。赤松親子の件のほかに、勝家の馴染む遊女の設定を改変している。「三空（御空）」は、原拠では三保浦の白丁の娘であるが（白丁にはもう一人娘がおり、その娘の名が「乙女」である）、『駿河舞』では、伯寮一家の娘が「乙女」であり、それとは別人の、新規の登場人物神楽良三八の娘を「御空」として描いている。

原拠にあるものの取り入れていない人物（遊郭の関係者・傍輩・家人等）もあるが、『駿河舞』の特質として、左京之助や三八など新規の登場人物を入れてストーリーを動かす重要な役回りを与える、あるいは赤松を父子二人にしたり、御空を三保の伯寮一家から切り離して新たな一家（神楽良家）の物語を加えることとしたように、原拠の構想を拡張する方向性を見ることができ。梗概②③⑤⑦⑧⑨の場面が『駿河舞』で独自に展開するものとなっている。

次に、『駿河舞』における新規の登場人物を中心に、ストーリーや場面の趣向をしてみる。まず、神楽良三八家が関わる展開を取り上げる。細川家の忠臣であった三八は、名刀紛失の責を負われ、これを捜し出したら帰参を許すという御意を受けて細川家を退く（梗概⑤）。『傾城天羽衣』で、勝家が身請代の

ために認めた証文を証拠に羽衣紛失騒動で嫌疑をかけられ、足利義政に追放を言い渡された件に由来する設定である。原拠で勝家の役であった事柄の一つを新規の人物である三八に割り振っていることになる。そして、三八は終盤、桂左衛門と連携して赤松追討に動く。これは、悪役の赤松を父子二人にしたことと呼応する正義方の登場人物の増幅であり、このことによってストーリーが枝分かれし、作品に重層性が与えられている。また、三八は満祐の手下を騙って靄雲の隠れ家に潜入するが（梗概⑧）、このとき赤松勢を騙すため、三八は山中で斬られた赤松の手下の懷中から取った「割符」を見せる。『傾城天羽衣』では、足利討滅を目論む左衛門が諸国関所往來の「焼印」を手に入れる件があり、これをアレンジして取り入れたものと見える。原拠で左衛門に付与されているモチーフを三八に割り振り、三八を左衛門と並ぶ位置付けに引き上げ、二者それぞれが赤松を追いつつも構図を完成させている。

さらに、勝家の馴染む遊女を三八の娘としたことをはじめ、妻子の者も、ストーリー展開の重要な位置に置かれる。妻の爪木は、眼病を患う三八の葉代のために身売りを決意し、幼い息子の三松を稲荷に捨て置く（梗概⑤）。三松は、赤松元家臣で旅商人の組屋六郎左衛門（これも新規の登場人物である）に拾

われる。この話は、その後、細川勝元の嫡男勝千代も捨て置かれたところを組屋に拾われ、組屋は赤松に勝千代殺害を命じられると偽って身替わりに三松を斬って見せ、赤松が氣を許して名刀を手放す展開（梗概⑦）となる。

このうち勝千代が捨てられる趣向は、『傾城天羽衣』での、月蝕に誕生した足利家の姫君が厄除けとして野に置かれた隙に赤松に連れ去られる件をもとにしたものである。『駿河舞』では、勝元が相続をめぐる風聞を憚って勝千代を捨てるも、奥方の懇願により、この子を拾った人を実父として藩中の家士に預けてもらおうと画策、しかしながら組屋はそれを拒んで連れ去って行くこととしている。加えて、組屋の人物を捨子を養育する善根者とするにより、捨子の話を反復させて三松を拾い育てる件を追加し、身替り話を導いている。

三八の一家を挿入した際の趣向の工夫を、もう一つ挙げておきたい。神楽良三八の名は、『傾城天羽衣』で細川勝元が遊女屋に潜入するときの変名「佐々良三八」から採っている。「ささら三八」とは、疫病や疱瘡を防ぐ呪いとして門戸に貼った文句であり、『撰陽奇観』にも宝暦三年の記事に「当冬 疫病の咒張札」として「大坂市中家竝ニキノニヤノハノモノ さ、ら三八宿といふ事を書いて門戸ニ張る」とある。そして『駿河舞』

では、捨子を育てた善根によって、組屋は疱瘡を軽くする利益を授かった者であるとし、組屋の家で勝千代と三松が疱瘡にかかる筋も用意している。ここには、素材の特徴をストーリーのなかで活用しようとした跡を見て取ることができる。

続いて、風早左京之助と三保の伯寮親子をめぐる趣向を考えたい。伯寮の人物設定は、『傾城天羽衣』に娘の台詞で「私が先祖は羽衣の家 天下の御重宝に成りましたる其縁により お前様の親御政元様の御取なしにて 親白了は此駿河の国にて知行を貰ひ 御家来も同前」とあるところを踏まえつつも改変を加えて、足利義政が散逸を惜しむ秘曲を蔵する、伶人家の子孫としている。本作はその零落から書き起こし、伶人家の再興で終結する趣向である。そして、『傾城天羽衣』には存在した桂左衛門と伯寮一家の交わりを一切取り入れず、秘曲の伝授を願う若者風早左京之助を新たに造型して伯寮の娘との恋物語を挿入する。

『駿河舞』における伯寮・左京之助のストーリーに関して最も重要と言えるのが、作中で強奪される秘曲「羽衣」^(注23)の素材に焦点を当て、これをめぐる脚色を膨らませていることである。秘曲強奪の具体的な場面描写を加え、この場面で伯寮が横死するところを発端に敵討の筋が始まり東山の世界の筋に絡

んでいく。その終局では場面描写に工夫が見られる(傍線は稿者による)。

それ久かたの天といつは。二神出世のいにしへ。十方世界を定めしに。(中略) 聞も妙なる東かた。聲そへて数々の。簫笛琴箏篋^{くわうくわう}。孤雲の外に

満々たる足利の勇士ども物の陰よりあらはれ出

左右さ左右颯くの花をかざしのあまのは袖

左右一同に組付を

なびくもかへすも舞の袖

(中略)

去ほとに時移つて。天のは衣浦風にたなびく。三

穂の松原。浮島が雲の。足高山やⁱⁱふじの高根

幽に聞ゆる鐘太鼓軍馬の音は父満祐。稲葉山より攻来る大軍ならんと思ひの外。神楽良三八桂左衛門逆賊紀^き埴^はルが首討取。凱歌をあげて帰京せり

伯寮になりましたつもりで霧雲が披露する「羽衣」の章句の合間に、桂左衛門・三八勢が包囲するさまを描いている(紀埴は満祐の称である)。傍線部ⁱⁱはそれぞれ、原典の謡曲「羽衣」に「孤雲の外に充ち満ちて」「富士の高根、かすかになりて」とあるところを踏まえて繋いだ表現であり、ここでは、謡曲作

品そのものを活用する形で臨場感が工夫されている。

このほかに、乙女・左京之助の恋物語の場面(梗概②)でも、文芸作品からの摂取が見られる。左京之助が扇面に書いて投げ入れる「女おんな感なまけ陽やう氣き春はる思おも男おとこ 男おとこ感なまけ陰いん氣き秋あき思おも女おんな」とは『毛詩鄭箋』^(注24)にある『詩経』国風邶七月の注の一節である。

また、赤松勢に捕らえられた乙女が左京之助の前で琴を弾かさ(梗概⑧)、「俛ならぬ身に俛ならぬ透額鬢のほつれがさへさゆる。」「清き此身を濁す世の人は」「あだしゆふべに靡くもつらや」と唄うのは、地歌「なたねざと」(享和元年(一八〇一)刊『新大成糸のしらべ』^(注25) 所収)の章句である。

このように、まずは伶人家とした伯寮周辺の場面において、文芸素材の摂取を重点的に行っている。さらに、このほかの箇所でも文芸に寄せた趣向が見受けられる。三八が眼病を患って困窮し、唄いながら人家を巡って米銭を得る場面(梗概⑤)を設け、謡曲「柏崎」の章句を長文にわたり取り込んでいる。また、文芸作品ではないが、文化的な素材として、足利家の重宝とする名香をめぐる趣向もある。勝家の許嫁天津妃を差し出すよう求める靄雲に対して、御空の死首を天津妃のものと偽ろうと謀る左衛門に、天津妃は、燦らせると生きたままの面影が変わらないとする名香「日蔭の花」を差し出す(梗概⑥)。身替

りのストーリーを支えるこの名香の趣向は、足利義政の香道愛好を踏まえて取り入れたと考えられる。なお「日蔭の花」は、『名香目録』(高司房輔著、貞享二年(一六八五)写)^(注26)、『銘香録』(安永三年(一七七四)識語)^(注27)に確かめられ、実在の称であるとともに御空の境涯を重ねた意味合いが窺える。

本作の冒頭近くには「源義政公は。天性花車風流を好み給ひ。先年の兵火に焼亡せし。唐山に我朝の書籍名器を惜ませられ。諸家に秘蔵の珍物を聚るゝに。(中略)得がたきを得る事心のまゝなれば。此序廢れる道を興し。あるは猿樂。茶道の奥儀を定め給ふ」(巻一)と東山文化を叙述している。以上に見たような『駿河舞』での文芸・文化的素材を活用する趣向は、原拠の『傾城天羽衣』から舞台設定として東山の世界を受け継いだところに、その文化史的特徴の具体的事物を描き込んで脚色する試みだったのではないだろうか。

おわりに——読本形成の手法

本稿では、浜松歌国の初期作品二点の形成方法を見てきた。あわせ見ると、この二作では、もとにした先行作品に対して異なる方法を採用していると言うことができる。『忠孝貞婦伝』は、

話自体を新たに用意する構えであり、別話のなかで原拠の人物とエピソードとを投影させ、これに繋がる終局の模倣場面を際立たせる構想であった。一方の『駿河舞』は、話自体は原拠の大枠を踏襲して、登場人物の追加やストーリーの重層化を行うことで独自性を図る方法であり、加えて、時代設定から導き出した素材の工夫が顕著である。

また、用いられた趣向に関して、歌国によるこれ以降の読本作品とも類似が見られることを付け加えておきたい。『仮粧水千貫槽覧』には、刀から出る光によって居所が知れ、主従が再会を果たす場面（巻之四）があるが、ここでも「漢の世四百年の基をひらきし帝。大沢のうちにかくれし時。此雲氣顕はれ。妻の呂后有所を知らる。例をおもひ出れば。」と『史記』の高祖伝を引き合いに出している。これは『忠孝孝婦伝』の婿探しの場面に取り入れられたところと同じ件を指す。また、『忠孝孝婦伝』の大庭主計は草花を愛好する人物とされ、主計の設えた大庭家の庭に陰謀を仕組まれて伊織は自死を余儀なくされるが、『仮粧水千貫槽覧』の主要登場人物である鬼太夫も菊を愛好する者とされ、居宅の菊園で、匿った故主の子息の首を差し出すよう迫られる場面（巻之四）があり、似通うように思われる。『仮粧水千貫槽覧』の原拠との関係が確かめられず、この

趣向の出所が捉え切れないが、著作間で趣向を共用した可能性もあり得るのではないだろうか。

最後に、歌国による芸能作品をもととする読本が連なるところの、読本史の動向に触れておきたい。横山邦治氏は、馬琴による『小説比翼文』（文化二年刊）に始まる「巷談もの」の成功と、これに追隨した動きとして、上方での栗杖亭鬼卵による「巷談もの」作品の特性を分析されており（^{注28}）、冒頭に述べた通り、鬼卵の動きに加わる作者の一人に歌国を挙げられている。田中則雄氏は、『絵本壁落穂』（文化三年・五年刊、『神靈矢口渡』を粉本とする）をはじめとする小枝繁の読本について、歴史の展開を基底に据えて構成する方法をとることを指摘された（^{注29}）。また、馬琴、振鷲亭、京伝、鬼卵らによる浄瑠璃の読本化について、江戸と上方での作風の特徴を明らかにされている（^{注30}）。

本稿で明らかにした歌国の手法の試みを、これら一連の作者たちの読本制作との間でどう位置付けることができ、どのような意義を認め得るのか、さらに究明すべき課題であると考えている。

注1 「浜松歌国伝（未定稿／補遺その五）」『浪速叢書』一／

- 六（浪速叢書刊行会、大正一五―昭和四年）所収。
- 2 「狂言作者としての浜松歌国が経歴の改訂」『上方』四八（昭和九年一二月）。
- 3 『読本の研究―江戸と上方と』（風間書房、昭和四九年）第二章第三節。
- 4 「浜松歌国・曉鐘成」『論集近世文学』五（勉誠社、平成六年）および『日本古典文学大辞典』（岩波書店）「浜松歌国」の項。
- 5 『忠孝貞婦伝』は国立国会図書館蔵本による。
- 6 『駿河舞』は国立国会図書館蔵本による。
- 7 『仮粧水千貫槽覧』は国立国会図書館蔵本による。
- 8 『日本古典文学大辞典』「駿河舞」「仮粧水千貫槽覧」の項。但し『道中千貫樋』の脚本は管見の限り現在確かめられない。
- 9 国文学研究資料館蔵中村幸彦氏蔵本のマイクロ資料。
- 10 早稲田大学図書館蔵。
- 11 国立国会図書館蔵。
- 12 『浪速叢書』第一―六（船越政一郎氏編、名著出版、昭和五二―五三年復刻）による。
- 13 日本古典籍総合目録データベースによる。
- 14 早稲田大学図書館蔵。
- 15 叢書江戸文庫『竹本座浄瑠璃集（二）』（国書刊行会、平成七年）「三浦大助紅梅鈞」解題（法月敏彦氏執筆）。
- 16 『文政期読本の基礎的研究』（西日本近世小説研究会編、平成二八年）所収『会稽三浦誉』解題（三宅宏幸氏執筆）。なお、同解題では、『会稽三浦誉』に『三浦大助紅梅鈞』の絵尽にはない構図の挿絵がある点など、文体や挿絵を読本様式に合わせる工夫があることも指摘されている。
- 17 日本古典文学大系五五『風来山人集』（中村幸彦氏校注、岩波書店、昭和三六年）所収。
- 18 新釈漢文大系『史記八（列伝一）』（水沢利忠氏著、明治書院、平成二年）による。
- 19 国文学研究資料館蔵。
- 20 『歌舞伎台帳集成』九（勉誠社、昭和六一年）による。
- 21 注3前掲書。
- 22 注8前掲『駿河舞』項。
- 23 新編日本古典文学全集五八『謡曲集』（小山弘志氏・佐藤健一郎氏校注・訳、小学館、平成九年）による。
- 24 早稲田大学図書館蔵。
- 25 『日本歌謡集成』第八（高野辰之氏編、春秋社、昭和三年）

所収。

26 国文学研究資料館蔵宮内庁書陵部蔵本のマイクロ資料。

27 国文学研究資料館蔵盛岡市中央公民館蔵本のマイクロ資料。

28 注3に同じ。

29 『享和・文化初期読本の基礎的研究』（西日本近世小説研究会編、令和二年）第一部九「小枝繁の読本と『歴史』」。

なお、『絵本壁落穂』は新田義興の遺児を主人公とする内容であり、『忠孝貞婦伝』とは異なる構想・筋立てである。

30 『読本論考』（汲古書院、令和元年）第三部第四章。

付記 本研究は、JSPS 科研費 20K00285 による成果の一部である。

（ふじかわ れまん／お茶の水女子大学講師）

キーワード＝浜松歌国、忠孝貞婦伝、駿河舞